

## 要約

近年、日本国内において、イノシシ (*Sus Scrofa*) は増加傾向にあり害獣として扱われている。その背景には、農作物被害のうちイノシシによる被害が増加していることがある。駆除を行う一方で、狩猟者の減少や、都市部におけるイノシシ出没に伴い環境的被害・人的被害など様々な問題がある。2002年に兵庫県神戸市で日本初の「神戸市いのししの出没及びいのししからの危害の防止に関する条例」(以降「イノシシ餌付け禁止条例」)が制定された。

人のイノシシに対する認識には肯定的なもの否定的なものがあり、両者には葛藤がある。その意識の対立軸は個人間の葛藤、社会集団の中での葛藤、社会集団同士の地域間の葛藤、一個人の内面の葛藤(両価感情: ambivalence)として存在するだろう。神戸市の事例ではこうした対立の解消のための方途として、「イノシシ餌付け禁止条例」が提案・制定されたが、本論文では上記のような葛藤について人文社会学的、生態学的なアプローチを用い多角的に調査・分析し、解決法(止揚: *Aufheben*)提案している。全7章で構成されており、以下に各章の内容を説明する。

第1章は、研究の発端となった背景や近年のイノシシの問題や本研究の意義を述べている。

第2章は、本論で扱う人のイノシシに対する餌付けの行動に関連し、基礎的情報としてイノシシの食性や能力などの生態を詳説する。さらに、主な調査地域とする兵庫県神戸市付近における人とイノシシの関係の歴史を紹介するため、遺跡資料の調査を行いその結果、イノシシの利用が認められた2ヶ所の遺跡資料の詳細を示している。

第3章は、日本人の動物観に着目し、影響を与えたと考えられる思想や文献から人と動物の関係の歴史を整理する。仏教の説話や、日本・欧州の法整備、環境思想を紹介しイノシシ餌付け禁止条例の事例の位置づけの考察をする。人は野生動物を、信仰対象などとして捉えられるなど、宗教的な理念を含み捉えられてきた。時代とともに社会的構造が変化しそれに適応した法整備などが順次現れた。法整備の形成のおおまかな経過や歩みを概説している。

第4章 はまず、神戸市の空中写真を用いて環境の変遷状況を示し調査背景の概要を述べている。

つづいて、「イノシシ餌付け禁止条例」に関連し、神戸市東灘区において、アンケート、インタビュー、ルート調査などの手法を採用し、人の意識・行動調査やイノシシの出没状況を実施した。条例制定後は道路上のイノシシの出没は減少しているが、天上川の河床に定住したイノシシが認められ、人の餌付け行動は継続されていることを明らかにしている。人のイノシシに対する意識は好意的なものが多く、餌付け行動が感情に基づいたものであり、条例を有効化するための課題を指摘している。

さらに、神戸市東灘区におけるイノシシに対する人の行動、人の行動に対するイノシシの反応行動に関する調査を実施し、その結果に基づき、河床部と山間部での人の行動差を検証している。人のイノシシに対する行動を無関心的行動・能動的行動・積極的行動・敵対的行動・逃避的行動にカテゴリー別に分類するとともに、人の行動に対するイノシシの行動を活動的行動・物欲的行動・攻撃的行動に分類している。さらに河床に生息しているイノシシと山林に生息するイノシシは人と隔離されているかいないかという違った状況下にあるが、その物理的な環境の差が人のイノシシに対する行動に差をもたらすかを明らかにするために、両場所における人の行動の差を検証している。続いて、男女比、年齢層比の影響を統制しても、カテゴリー別の行動に地域差がみられるか否かを検証するために、回帰分析を実施している。その結果、無関心的行動は天上川流域部付近と若年層・中高年層において、能動的行動・積極的行動は保久良山付近と未成年層において多く確認された。また餌付け行動も未成年層が多くとっていることが確かめられた。イノシシに対する人の能動的・積極的行動はイノシシの物欲的行動を誘発する可能性があることを示し、イノシシと人の行動の関連を指摘している。

第5章は、神戸市東灘区の市民に対して行ったイノシシに対する意識調査を踏まえ、兵庫県猟友会会員に対してイノシシや野生動物に対する意識調査を実施し、その結果に基づき人の行動範囲や行動の差が動物に対し意識の差の有無を検証し、分析結果を提示している。猟友会会員はイノシシに対し約48.3%の人がマイナスイメージを持っており、一般市民のイノシシに対する意識と比較し、約44.4%多く認められ、人の行動や経験が意識の差を生むことを指摘している。また猟友会会員のなかで、農林漁業従事者と非農林漁業従事者に分別し、イノシシに対する肯定的、否定的な意識にも差がみられ、狩猟を行う共通項があるものの職業により意識に差があることを示している。

第6章は、鹿児島県奄美市において、イヌと人に関連し、イノシシの出没状況についてカメラトラップ法を用いて検証した。背景には、奄美大島におけるイノシシによる農業被害額はイノシシによる鹿児島県における農業被害額の4割以上を占めるという状況がある。また猟期の延長や自治体と猟友会によって、より多くの捕獲を目指しているが、イノシシによる農業被害が減少していない。イヌと人の存在・行動に着目し、奄美大島、名瀬鳩浜・名瀬佐大熊を調査地として、自動カメラで撮影された写真から、リュウキュウイノシシの成獣と幼獣行動時間を明らかにすると同時に、イヌとヒトの行動時間との相関関係の有無を検証している。調査地では成獣と幼獣の出没時間は異なった。イノシシの成獣はイヌと人を避けて行動していると思われる。ただし、時間帯により相関関係は変化し、猟期と非猟期の間で変化も見られた。すなわち、猟圧によりイノシシの成獣は行動時間を夜間にシフトしていることが明らかになり、人とイヌの存在がイノシシの行動時間に影響を与えており捕獲を困難にしている可能性を指摘している。

第7章は、結論であり、各章で示された主要な成果をまとめ、総合的に検討し、今後の人とイノシシのより良い関係の構築のための具体案を示しつつ、双利共生は困難であると結論づけている。